



みんなのニーズをくみ取り社会貢献 農業研究者の役割は？



切り花検定室でダリアの日持ちを調査している様子＝農研機構提供

みなさんは「流通」という言葉を聞いたことがありますか？ 流通とは生産された商品が、消費者に届くまでの流れのことです。

国内の花きの生産者は5万8千戸（2015年）あり、気象条件を生かして北海道から沖縄まで広がっています。大切に育てられたあと、出荷されます。花をあつかう小売業者は全国におよそ2万7千店（2014年）。花の流通には多くの人がたずさわっています。

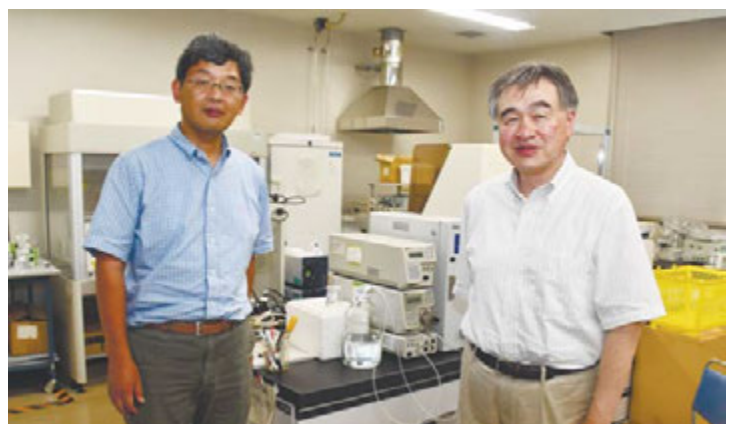
農研機構の花き生産流通研究領域長の中山真義さんは「研究者の役割は、生産者や市場関係者、小売業者、消費者など、それぞれの立場にいる人たちのニーズをくみ取って、社会の役に立つ研究をすることです。科学だけでなく、文化や経済、社会のなり立ちなどさまざまな知識が求められます」と話します。

花の産業をよりあげようと、2014年には「花き振興法」という法律がつけられました。2015年度に始まった農林水産省の研

究プロジェクト「国産花きの国際競争力強化のための技術開発」はその法律の趣旨にそって、花き産業をささえる技術の開発を目的に企画されました。

プロジェクトは19年度までの5年間にわたって行われ、農研機構とともに多くの都県の農業試験研究機関、大学、民間企業などが、育種や栽培、流通といったテーマで研究に取り組みました。

プロジェクトをとりまとめた中山さんは「たとえば東京オリンピック・パラリンピックに向けては、夏場の花壇の植栽に向いた品種は何か、適切な管理方法は何か、といった研究など、さまざまな研究成果が上がっています」と話します。それらは技術マニュアルなどとしてまとめられ、植栽業者や生産者が利用できるようになっていきます。



小野崎隆さんと中山真義さん(右)

Q & A

Q 研究者になりたいと思ったきっかけを教えてください。

A 昔から草花の栽培が大好きでした。中学生のころは種苗メーカーから園芸雑誌を取り寄せては熱心に読み、最新の種子を買っては育てていました。花の研究がしたいと思って、進学した京都大学農学部ではカーネーションやダイアンサス(ナデシコ)の染色体や花粉について研究しました。

Q 農業をテーマにした研究の大切さとはなんでしょうか。

A 食料やそれを生み出す農業は人間の生活にとって不可欠です。その研究には大きな意義があると思っています。

Q 研究者としての苦労ややりがいがありますか。

A 研究は、わからないこと、知られていないことを知ろうとする行いなので、予想通りにならないことが多く苦労します。その予想通りにならなかった現象には、だれも予想できなかったことが反映されています。そういう現象を通して新しい事実や考え方をみつけることに楽しみを感じます。

Q 研究者にあこがれる子どもたちに伝えたいことは？

A 予想とは異なる結果が得られたときこそ、新しい発見のチャンスだと思ってください。

みんなの声に耳を傾ける研究者

